

[ワークライフバランス]

6 子どもがいるからと あきらめないために

—仕事と育児の両立における現実と期待する未来—



五十嵐悠紀 | 明治大学

大学教員の日々

私の専門はコンピュータグラフィックスやユーザインタフェースという分野です。大学教員としては担当講義や演習などの授業を行いながら、学内業務などの委員を請け負っています。また、研究室に在籍する学生さんのゼミ活動を指導しながら自身の研究も行っています。一方、プライベートでは小学校5年生男子、2年生男子、保育園児(4歳)女子の3人の子育て中です。

普段は保育園や学童保育を使いながら仕事をこなしていますが、それでも時間が足りません。「家事、育児の両立」と一口に言っても、食事を作って食べさせてお風呂に入れて、寝かしつけるだけでも大変だったところに、子どもが成長するにつれて、宿題の丸つけや連絡帳チェック、習いごとの送迎や保護者会……。昨今話題のPTA役員も子どもの人数が少なく「1人につき1回はやる」という小規模な地域のため、小学校・学童保育・保育園と毎年何かの役職をやり続けて早5年です。

日々の生活はというと、保育園等の送り迎えの都合上、9時～5時でしか大学にはいられません。明治大学100分授業が始まり、4限が終わる時間が5時ちょうどになったので授業が終わったらダッシュで帰宅です。研究室のゼミも5時までには必ず終わります。夕方以降はLINEで連絡を取ったり、遠隔でファイルをやりとりしたりしながら時に

はSkypeを利用しつつ、ディスカッションをできる体制をとっています。

大学でも男女共同参画の研究サポーター制度というものを利用させていただいており、これまでは1人で行っていたような作業を研究補助員さんと分担することで、学生への教育の時間やライフ(育児)の時間の確保にもつながりました。また、これをきっかけに「私にしかできないことは何か」を意識するようにもなりました。

研究発表スタイルの変化

出産前後で研究者としての研究業績の発表スタイルも変化しました。出産前は有名な国際会議はデモやポスター発表でもよいから投稿して現地へ行っていました。そして登壇発表を聞いたり、懇親会に出て、時にはまだ未発表の新ネタを見せながらたくさんの人と議論をしていました。

一方で出産後は多少レベルを下げてでも日本で開催される国際会議を狙って出すようになりました。また、産後しばらくは学会発表なしで論文誌へ投稿をしていました。その他、海外の研究者が学会やサバティカルなどで日本に来たときには自宅にご招待して一緒に晩御飯を食べながら家で議論をするようになりました(図-1)。海外の研究者はご家族連れで日本へ来ることも多く、配偶者やお子さん連れのことも多いので、我が家の子どもたちも含めて一緒

にご飯を食べて交流をします。外食だとなかなか食べられない手巻き寿司にすることが多いのですが、子どもたちは一緒に「ロール！ロール！」と言いながら手巻きずしの作り方をレクチャーしたり、相手の子どもと折り紙を折ったりと、言葉が通じなくても国際交流する姿に私も良い影響を受けています。研究の議論はもちろんのこと、研究と育児をどのようにやりくりしているかという話や、子どもの教育についてなど、日本との違いも含めて国際的な話を聞けて、参考になります。

制度より空気が大事

子連れ出勤の是非が巷でも問われていますが、私も長男を出産後この10年間で子連れでの海外出張のほか、学会併設のベビーシッターサービスを利用したり、遠隔操作ロボットで自宅から学会に参加したり¹⁾と、さまざまな経験をしてきました(図-2)。またヒューマンコンピュータインタラクション分野では日本最大のシンポジウムである本会インタラクションのお昼休みを使って女性研究者・女子学生のためのランチ会を企画して7年²⁾。事例を収集し皆で共有して活かす努力をしています。女性の働き方に関するメディアを通じた情報発信も行ってきました。

子連れで参加するにはそのための交通費や現地宿

泊費、現地での託児代など金銭面も重くのしかかってきますし、当日病気にかったらどうするのかといった問題も常につきまといます。けれども、子連れでワークショップをやらせていただいたり、学会参加やガイダンス等の学内業務を行えるのは、子連れでもよしとする空気のおかげだと思っています。「制度より風土、風土より上司」と聞いたことがありますが、制度がなければ始まりません。ヒヤリングをしながら本当に使える制度を組み立てていく必要があると思っています。けれども制度だけあっても上司がそれに反対していたり、学科教員(会社であれば部署やチーム)が反対する空気だったら言い出しにくいでしょう。積極的に子連れを認めてくれる空気があることを常にありがたいと思いながらも、後進のためにも、良い空気であり続けるために子連れ出勤でへまをしてはいけないと身が引き締まったりもしているのです。

参考文献

- 1) 五十嵐悠紀：テレプレゼンスロボットによる遠隔学会参加の体験報告，情報処理，Vol.56, No.5, pp.478-481 (May 2015).
- 2) 情報処理学会インタラクション併設 Women's Luncheon <http://tinyurl.com/i2019womens>

(2019年4月11日受付)

■五十嵐悠紀(正会員) yukim@acm.org

2010年東京大学工学系研究科博士課程修了。博士(工学)。JST さきがけ研究員，IPA 未踏事業プロジェクトマネージャ兼任。Yahoo! ニュース個人オーナー。



■図-1 海外からの研究者と自宅で議論すること



■図-2 学科ガイダンス。春休みで最前列に息子の姿